

三河 アララギ

平成二十九年

三月号

第六十四卷 第三号



ニューヨーク日記(125) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

HINAMATSURI

Blue Shoe Diaries



おひな様だね! 今年は家でお友達がちらし寿司作っているくれました~! イェーイ! 一年中出しっ放しの雛人形を今日はテーブルの上に飾ってディナーパーティー。ワイン(白酒じゃないのよね~)も沢山飲んでお話し弾んだよ。こういった感じのお祝いも良いよね。ちょっと日本に居る気分になるし!

It's Girls Day in Japan! It's a holiday where girls get together and eat certain dishes, and drink a type of sake. It's a great reason to get together and have a mini dinner party. This year, our friend offered to make us some chirashi sushi which is one of the traditional dishes. And it's just so appropriately pretty and full of color. To highlight the day, we placed our hina dolls on display on our dining table. (We normally have these displayed on our bookshelf but superstition says that you'll never get married if you don't put away your hina dolls on the day after Girls Day... Take that as you wish.) And we chatted the night away. Being girls!

目次

第六十四卷第三号(通卷七五九号)

表紙・サボテン	今泉 由利 (1)	石田 文子 (26)	重野 善恵 (34)
ニューヨーク日記 (25)	Blue Stone (2)	森 厚子 (26)	今泉 由利 (35)
黄素馨の門	御津 磯夫 (4)	山崎 俊子 (26)	米田 文彦 (35)
歌集「はゝきくよ」Ⅲ	大須賀寿恵 (5)	三田美奈子 (27)	柳田 皓一 (35)
歌集「草々」	今泉 米子 (6)	水野 絹子 (27)	山元 正規 (36)
歌集「はゝきくよ」Ⅰ	河原 静誠 (7)	牧原 規恵 (27)	山迫 京子 (36)
木槿庵	岡本八千代 (8)	稲吉 友江 (27)	植村 公女 (36)
蒲の穂綿	今泉 由利 (9)	鈴木美耶子 (27)	虚 子 (37)
正月料理	弓谷 久子 (10)	現代学生百人一首 東洋大学	かさね吟行会
一人旅	内藤 志げ (11)	若林 哲哉 (28)	『酔いの徒然』(59)
恩師を偲ぶ	林 伊佐子 (12)	塩川 蓮 (28)	本からのあれこれ (16)
乾杯	安藤 和代 (13)	加藤 朱香 (28)	ある自然科学者の手記 (58)
人生	青木 玉枝 (14)	小椋 環 (28)	絹の話 (76)
孤立	伊藤 忠男 (15)	遠山 愛実 (29)	短歌に詠まれた茂吉 六十六回
どんと焼き	鈴木 孝雄 (16)	小宮山 芙 (29)	大橋 望彦 (44)
初雪	清澤 範子 (17)	望月 柚利 (29)	今泉 雅勝 (46)
初日の出	近藤 映子 (18)	山本 朝水 (29)	楽しい時間 (52)
北斎	森岡 陽子 (19)	山上 信子 (30)	漢詩研修 (5)
寒椿	足立 晴代 (20)	森岡 陽子 (31)	隙間
横綱	阿部 淑子 (21)	白井 信昭 (31)	「氷魚」のことから (194)
柊の花	白井 信昭 (22)	森はふしぎなオルゴール	ことのはスケッチ (457)
雪景色	杉浦恵美子 (23)	高橋 育郎 (32)	今泉 由利 (56)
轍	山口千恵子 (24)	『歴代天皇御製歌』(七十二)	編集室だより (二〇一七年新年)
年末年始	夏目 勝弘 (25)	貫名海屋資料館 (33)	三河アララギ (58)
『いーはとぶ』	吉見 幸子 (26)	森岡 陽子 (34)	野菜の花 (9)
『いーはとぶ』	牧原 正枝 (26)	田中 清秀 (34)	お知らせ・「三河アララギ」について (60)
『俳句』			

黄素馨の門（昭和四十一年〜昭和四十四年） 御津磯夫

紅とみどりとならび一つ鉢に蓮華寺楓のきぬがさひらく

やすらけきものただひとつ残れりとわが足に踏む苔の土のうへ

土に残る石も瓦もさざれにて春の耕しに投げ出だすかな

迷ひ入りし伊知多の宮山くだるときまださきの山ひとつ越えゆけ

北よりに射しいづる朝の日のひかり藪の中には竹の葉のちる

瀧の上のぬれし巖よりうつし植ゑて生きながらへる那智の玉苔

踏みごたへなき土のうへめぐりゆき今朝は筍を掘る力あり

道を教ふるまでになりぬと彼の國にはつはつ過ぎし一年をいふ

この年の若青竹の立ちそろひ藪の中には朝の霧あり

實をたててはやく枯れゆく寒葵その下地^{つち}をまたたのむべし

歌集「はゝきくさ」Ⅲ

大須賀寿恵

赤き朱きカンナの大葉は除草剤に明るき色の緋となりぬ

ところどころ色の抜けたる数珠玉の葉ずれの音す降る雨の中

三年三月通ひて癒えしといふを聞く肩の注射の滲みとほりつつ

医学よりなほ信じたし己が身にあるべき自然治癒の力を

自然治癒を待つばかりぞとわが云ひてすすめらるれば梅酒も作る

灸も鍼もマッサージさへもかへり見ずただひとつわれは自然治癒を信ずる

養命酒飲めば下肢の貧血も痛みも癒ゆるとたはやすくいふ

おのづから洩わきいづる痛みありスモンを問はるればかくのごと答ふ

憎みても憤りても離れぬスモンならば足のこはばりをさすりてをらむ

たまきはる命のきはみ疼きくるスモンとともに生きてかゆかむ

歌集「草々」

今 泉 米 子

はなびらはその花びらは白々とたゆたひながら満ち足りて散る

庭草の間に萌ゆる目に立ちて音こそたてね二人静の花
あはひ ふたりしづか

二人静のめぐりの草を少し引き連休などもたちまち終る

消毒液に両手浸してゐる窓に花をさまりし錦木の雨

また今日も雨となりたり病棟の屋根の上なる枇杷の青き果

千坪のわが庭に千坪の草のしげりああ蛙らしきものを踏みたり

かがやきて天に若葉の戦ぐなり庭の中なる植ゑざる櫟

日毎日毎散る黄素馨の黄の花の門柱めぐりに吹き寄せらるる

移しおきし大文字草の花白し今日すこやかに久我山にゐる

中空にまだ光なき十日の月うろうろとして梅雨に入りぬ

歌集「はゝきくさ」I

河原静誠

念仏の声寂かなりし興福院の裏のドリームランドのジャズの聞ゆる

十全堂の庭に立ちます六地藏示したまへや六道の辻

腸管の癒着の痛さ今更になげきなげきて起き臥すわれは

幾度か手術をうけて戦ひ来し病に今日もいどまむとする

かにかくに腐りし腸をかかへつつ今日も呼吸を吾はつづくる

病巢に障る仕事と知りながら来し十年の保育をぞ想ふ

たまはりしみやこわすれの咲き始めてわが枕辺に春風の吹く

釈尊の槃の日なり病床に遺経誦しつつ一夜明かしぬ

真夜中の投薬うけつつ独り誦す看病福田はえれ第一也と

吾独り病むと呪ひし夜半にして遺経を誦す今静かなる

木槿庵 ムクゲアン

蒲郡 岡本八千代

独りこもるわが六疊の居場所をば木槿庵 ムクゲアン とするか迷ひつつあり

わが六疊あらゆる本本に囲まれてその中に居る己れの倅せ

今はたゞムクゲの白き花咲くを待つばかりにて今日も暮れつつ

夕されば夕餉の支度に母屋へとゆかねばならずわれの現実

注文の「漱石の思ひ出」届きたりわが掌 てのひら に重き感触

漱石の本の箱装画に描かれし花秋菊 ゼニアオイ 銭葵 タチアオイ 蜀葵 アオイ 淡く

秋菊 ゼニ と銭葵 タチ 蜀葵 アオイ の花の絵よああ橋口五葉の「百花譜」よりとか

氷雨 ひ 降れば氷雨も楽し老いっつも長靴履きて細道歩む

西浦に雪の積もるは何年ぶりか今朝わが庭も白雪凸凹 でこぼこ

やうやくに白雪解けつつ光りつつ早くも来たる小雀 こがらめ らしき

蒲の穂綿

東京 今泉 由利

少しほど時代は異にするばかり藤田画伯のブエノスアイレス

ひと粒のひと種ごとに羽をもち蒲の穂綿の今し飛びゆく

一年の月日を重ね今し飛ぶ蒲の穂綿を見送りゐつつ

赤き実も朱き実もあり紅くれないもいまだ見付けぬ冬の鳥達

蛇の髭の細き葉群を搔き分けて探しい出さむ瑠璃色の玉

遮ぎるはダークマターかダークエネルギーか幾条をして朝の光りは

真向ひて一億五千万キロを感じるのぼりくるくる朝の太陽

火山岩の山肌荒らら華厳の滝この風景をひとり占めつつ

人の上に人が乗るほどぎっしりの小三治師匠「野晒し」聞こゆ

のれそれの三杯酢よりはじまりぬ二〇一七年お寿司はじめ

正月料理

豊川 弓 谷 久 子

一直線に射し来る初日を浴びて立つ暫し無心となりて侘ちをり

子と孫の手料理に今日は招ばれをり穏やかな空正月二日

みさとが揚げし鶏唐揚げも並びゐてまんざらでも無し正月料理

主治医より帰る野道の野水仙一束摘みをり夫への供華に

三日月に寄り添ふ如く光りゐる金星仰ぐ冬の夜空に

カーテンを開けば白々銀世界我の世界の変りゐる朝

為す術も無く妹の手の甲をそつとさすりて帰り来りぬ

妹が先に逝きたり未知の世を思ひてゐたり眠れぬ夜半を

福を呼ぶ小さき達磨を子が編みて小さき座布団我が縫ひをり

我が一首ルーペにて捜さむNHK短歌大会作品集に

一人旅

豊川 内藤 志 げ

砥鹿神社のお詣り終えし夫は云う熱田のお宮に一人で行くと
無人駅のキップは何処にて買うのかと聞きて別るる私は家に
三時過ぎ帰る頃かと携帯を元氣な声にてもうすぐ家だよ

おみやげのかわら煎餅破れているそれもよろしと夫は元氣に

一人旅行きは名鉄帰りは東海八十八歳の夫の元日

雪の舞う空を暫く見上げおりかいま見えたり淡きお日様

しだれたる竹をそおっと潜り抜け一人の径を下りて歩む

冴え渡る空に鋭き上弦の月を仰ぎぬ正月三日

中空に鋭き月と星一つ澄みたる今宵のカーテンを閉づ

廣場にも家の隅にも雪だるま今の家のだるまは長き鼻もつ

恩師を偲ぶ

岡崎 林 伊 佐 子

亡き師より賜りて学ぶ作歌の友表紙やぶれて歲月しのぶ

茂吉氏を学べと吾が手に文字書きて教え賜わる東京歌会に

始めての東京歌会に師と友と清澄庭園の吟行なつかし

若き日の突発難聴をのりこえていつか身につく読唇術が

着ぶくれて老いしふたりは炬燵にて会話たのしみボケ防止する

畑仕事を終えて見上げる茜空飛行機雲は白く棚引く

新鮮な山の空気をすいながらひとり楽しむ山の散策

しづやかに梢をわたる山の風ゆるる梢とゆらざる梢

車窓より仰ぎし滝の凍りゐて白昼なれど光れる寒く

幾度か霜をかぶりし冬草が枯草畑に青々凍る

乾杯

豊川 安藤 和代

冬の野は人影もなく鳥も見ずぼんやり吉祥の山は眠りて

はかどらぬ草抜く吾に合わす如小さき蜘蛛がちさき巢をはる

有馬記念キタサンブラック負けましたベッドの夫もがっかりの顔

鶉の鋭き声の響く部屋吾エプロンをしつかり結ぶ

年末もお年始もなく病む夫にせめて喫茶のジュースで乾杯

孫には孫の生き方があり夢があるパンジーに水たつぷり注ぐ

バリバリと働きたいる日を恋うや淋しげな夫に話題を変える

八階の病室の窓にくる鳩に言葉かけるが夫の楽しみ

夫の世話私がせねば誰がするそう思う時腰痛消ゆる

日輪は色柔らかに春を告ぐチューリップ芽日毎伸びゆく

人生 新城 青木 玉枝

今日の日もなんとか無事に終りたり部屋に帰ればホッと侘しさ

山並は夕陽に輝き美しき冬のひと日の暮れがての空

山里に住みて思ふは今更と悔のひと日の今日も暮れゆく

人生の流れは早しひと日づつこの山里に二年の歲月

思ふまい運さだめの縁とあきらめて夜のベットにしばし眠れず

窓辺にて枯原の庭をながめつつ間もなく迎へる新しき歳を

今頃は伊丹のサンロード売出しの呼び声人通りなつかしき

生れ来て九十年の歲月は楽しみよりは侘しき残り世

この歳になりて悔いしは手仕事の一つも出来ない今更老いて

師走月に入りて今年もあとわずか独居の部屋でしばし昔を

孤 立

大 阪 伊 藤 忠 男

人は人我は我にてこの世界行きつく先はいかなものかな

あの悲劇繰り返すまい人の知恵信じて今があると言うのに

マスコミを非難攻撃揶揄するは計算されし戦術なりや

イギリスにアメリカ続くイタリアも今年はどこで何が起こるか

哀れにも明日の手がかり探さねば見つけれぬと言うは誰ぞや

やっと耳傾け我が道問える歳これも後期の成せることかな

我が歳も後期と言われ次は何人生残り少しと言うか

何万の命預かる防波堤多分は困る万一も無し

己にも人にも厳し我が道の陰しさ思ひ逃げたくもなる

何あれど答えは一つ人と人共に生きるを選ぶが人なり

どんと焼き

沼津 鈴木 孝雄

どんと焼きお飾り年々数が減り柱の竹がひとときは目立つ

冬晴れの十三夜の月煌々とオリオン星座もかすみ見えけり

強風に吹き飛ばされて白雪の猛けく舞い上げ富士山覆う

大寒波峠を越して風戻り駿河湾にはダルマ夕陽

冬至雨小カブの葉っぱ急に伸び邪魔にならぬよう思い切り間引き

ホウレンソウ芽の出方がバラバラに時宜を失せば遅れ戻らず

根深ねぎシャベルに足掛け掘らんとす土凍てつきて刃がたたず

葉の中を覗いてみるともう花芽あわてて大根思い切り抜く

もうダメと諦めていたニンニクの土をひび割り芽を覗かせる

夜半より雨風急に音高く菜園気になり朝までまどろむ

初雪

春日井 清澤 範子

初雪は吾が家の庭の椿にもふんわり蕾を包みて降りぬ

五センチの雪は積りぬ吾が庭の貝塚もつく風情満点

解けぬうち庭の風情を楽しみて庭の隅ずみひと巡りする

雪止みて陽ざし差し込む庭に出て解け始めた庭もまた良し

久し振りに高気圧におおわれる夫と八王子神社に詣で祈りぬ

神社にて祈りてをり手を合わす小鳥のさえずりひと際高く

雪の降る終日ストーブ焚きをりて上に乗せたる葉罐やかん鳴りをり

八王子神社の森には沢山のどんぐり落ちるも熊は出ないと

よろけ居る吾に座席を譲りくれし若者に礼を言ひて降り立つ

北風の吹きつく駅の改札を抜ければ愛らし寒桜の花

初日の出

名古屋 近藤映子

初日の出東の高きビル間に光り上りて輝きぬ

晴天の三ケ日も過ぎ行きて娘と二人静かな正月

真東の山の中腹にそびえ建つ愛知医大の新館の姿

原子記号113の「ニホニウム」始めて日本の付けた名なり

神戸港を作りて百五十年とニュース聞けば息子に電話す

昨年は息子の息子二人誕生とお嫁ちゃんはさぞ忙しかろ

三河アララギ新年号私の歌が無いと友人より便り有

年末の予約無き診察は一日かかり抗生剤に咳の静まる

一月は室内にても二十度切るエアコン23℃に一枚上衣を

室内に入れたる亀の水槽もゴソとも動かず静かな朝

北 齋

東京 森 岡 陽 子

葛飾の聖夜に流るる協奏曲ピアノソリスト真赤なドレス

ピアノの音チャイコフスキーの名曲は雄大しなやか生命の賛歌

スマップと別るるテレビ冬の夜「夜空のムコウ」一緒に唄う

スマップはオンリーワンと手を胸にそれぞれ個性と唄で応援

門松で迎へる菩提寺のやさしさに家族揃ひ元旦詣で

車窓より富士山見ゆる年始め紺青色で北齋は描く

柴又の帝釈天へ初参り堂々の本殿庚申の猿

一面に広がる茶色の景色にはぼつんぽつんと鴉と白鷺

ほんのりと鴉色残る夕方にほんわか浮ぶまん丸の月

もこもこもこ蒲の穂綿はほっこりと瓢箪池に真っ直ぐに立つ

寒 椿

東京 足立 晴代

冬衣纏し峯の谷間に流れ落つるは一筋の水

寒椿白々咲きて雪の中緑の照葉の輝きありて

植木やに熊笹かられ猫じやらし奥に顔あり新葉があたらしき

早咲きの白梅香りうぐいすの待ちても来ないまだ風寒し

健気にも大寒おそれず咲く花の種とりどりの美しさとは

未曾有の吹雪日続き現地ではさぞかし難儀と我は思ひぬ

風あげと羽根音高くお正月日本の文化なつかしく思う

突然の家の中での怪我をして骨(肩)折れたるは無念なりけり

苦勞して幸とならむと思こころう心のあり方考え方で幸とならむ

手術中三途の川で帰えされて現世にもどつて頭モヤモヤ

横 綱

横 浜 阿 部 淑 子

北国の吹雪激しく視界ゼロ鶴見の青空分けたきものを

一昼夜降り積る雪に苛さいなまれ進めぬ車内の人の辛さよ

寒き夜に茹でた餃子の喉ごしは滑らかにして無添加の味

稀勢の里努力の継続報われて横綱への道昇りつめたり

稀勢の里横綱四股しこを踏みながら責任知りてか凜しき顔よ

柊の花

豊川 白井 信昭

葉の間に白く小さく密にして香り届かず柊の花

暮れ残る茜の色に空の青観覧車回る明かり眩しまばゆ

二階建て吹きぬけにしてガラス張り庭木の緑癒しの空間

麓より電柵巡らし御堂山野兎のうさぎいくつみな飛び越えて

時忘るほどに頂に我は立つ丹野城碑の土塁跡の上

山道のヒメハルロードここよりは道細くして沢ゆかむとす

うつ蒼としたる社跡見上ぐれば道の上を伸ぐ椎の太枝

この沢の源流下れば丹下川源氏蛍の里へ行き着く

佐脇浜安礼崎跡あれのさき空高く風を靡びかせ三角風三つ

返り咲く木香薔薇のわが家に彼女は来たり雪舞い降る日

雪景色

蒲郡 杉浦恵美子

行く宛はなけれど何故か捨てられぬスキー場からダイレクトメール
雪景色の絵葉書暫し見入ったり夫が愛せし信濃の山々
去にしと聞く知人訪ひしは三年前また来て欲しいと言はれしものを
やれ寝具掃除もせねば我が日常俄に忙しされど弾めり
ベランダの我が干したる蜂屋柿弟気侃にひとつ挽ぎたり
弟よ我の雑煮は母譲り昆布を敷いて茹でたるお餅
雪の日の水族館を訪れてアシカのシヨウを眺めてをりぬ
雪の日のアシカのラブは水中を目掛けてジャンプ飛沫の冷たさ
雪降りて外出するもままならぬ今朝からせつせとガス台磨き
雪の日は音なき世界その故か掃除しつつも想ひ深まる

轍わだち

豊川 山口千恵子

わが庭に今年も来たるジョウビタキ一羽のみなり今日も一羽
わが為に買ひこし上着小さめなり少し太りしと娘と言ひ合ふ

洋服はもういらなと言ひつつもプレゼントされれば心はうれし

大根を五本白菜二株を一輪車に積みて風向ひ帰る

金網の罫に二匹のアライグマ可愛らしきと言ひてもおれず

積りたる雪に二本の轍つけ角曲りゆけるは牛乳屋さん

北側の屋根に一日雪残る雨だれの音一日つづく

ふくらめる蕾も見ゆる梅の枝丸く雪積むところどころに

群になり庭木の赤き実おそひゆき数多の糞を落としゆきたり

冬空に切口白しろさらしつ々枝打ちされし棕の大樹は

年末年始

豊川 夏目勝弘

年末に草取り清めし黒土の庭に散りゐるはアジサイのもみじ葉

石垣の隙間を好み咲きつづく赤き玉なす花はツルソバ

浮雲の一つ二つの流れこよ青高だかし冬の天空

我が庭は生垣のみの狭き庭ジヨウビタキが姿見せるころ

産土の神と寺とを詣るのみの正月がいつまで続けゆけるや

正月の料理は雑煮の一種類我が単純化の極みといはむ

電車よりま白き富士の山頂が数秒見られる快晴つづく

裏山に日日さわぎゐし群れ烏元旦よりいまだ来たらず

一月のカレンダーの予定欄に記入のあるは二十五日のみ

カレンダーのカールせしが直ぐとなりはや一月も半ばとなりぬ

『いっよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

賀茂川の辺りに蕎麦屋立ち並ぶ話に花咲く師と友と我
年暮れの今宵満月輝きて我が庭の木々に静かに照らす

吉見幸子

赤浜の道は一斉の下水工事車にひとにこのにぎはひよ

田畑にもこの町にさへ煙たたず夕餉も朝餉も不揃ひのやう

牧原正枝

香炉よりはかすかな煙お茶の葉は部屋に漂ふ雨降る午後に
添書に逢ひたしとある賀状あり吾も逢ひたし五十年経て

石田文子

天下坂すぎてかさかさ落葉舞ふ見えだしきたり知柄の海が
吉良の里の土手を黄に染むをみなへしそして尾花の穂の穂のひかり

森厚子

御仏に手を合はせる病みし友今日は爪をば赤くそめをり
百歳の媼はひとみ輝かせ今が一番の幸はせと言ふ

山崎俊子

夕星^{づつ}の瞬きは君のメッセーじか吾も一日暮^{いち}しましたよ
熱き湯につかりて君はゆつくりとかの日の鈴鹿の白さを云ひにき

三田美奈子

夕暮れの城山にうかぶ赤鳥居時雨に濡れて何見て来しや
中橋に異国の言の葉賑はへり飛驒の錦秋我もよそ者か

水野絹子

見上ぐれば雲広ごりし暗き空一つただ一つ金星の光
寒き朝かじかみし手をすり合はし幼き遠き日の浮かび来るかな

牧原規恵

朝摘みの青菜で作りしスムージー夫は今朝も「不味い」と言ひつ
晩酌に二合の酒を楽しみし父十七回忌に熱燗もそつと

稲吉友江

近江へと旅する今朝の朝日影未だ西空に十六夜白し
やはらかき冬の日の照る道の端にいつまでも話す従姉と私

鈴木美耶子

現代学生百人一首

東洋大学

僕が見る半月君が見る半月二つ合わせて満月にしよう

石川県立金沢錦丘高等学校二年 若林 哲哉

浅間峰^{あさまね}の肥えし大地に生え伸びる草を食わんと牛は駆け行く

長野県佐久平総合技術高等学校一年 塩川 蓮^{れん}

お小遣い貯めてようやく手に入れたヒールの高さと大人の気分

(長野県) 伊那西高等学校一年 加藤 朱^{あや}香^か

背表紙が色褪せている祖母の書を独りでなでる祖父の手のひら

(長野県) 伊那西高等学校二年 小^お棕^{ぐら} 環^{たまき}

人受けを気にしてばかりいる私「つまらないよ」と母の一言

(長野県) 伊那西高等学校三年 遠山 愛実^{まなみ}

冬が好き雪の匂いもオリオン座も「寒い」と言って繋がれる手も

(長野県) 上田西高等学校一年 小宮山 芙^{ふみ}

間違いを修正テープで直すよう上辺に過ぎぬ貴方の謝罪

(長野県) 上田西高等学校三年 望月 柚莉^{ゆり}

冬服に袖をとおせばひしひしと近づく入試肌で感じる

(愛知県) 光ヶ丘女子高等学校三年 山本 朝水^{あさみ}

歌集 「夢のつづき」

水 上 信 子

石だたみ紅いランタン遠近の流れにゆるる麗江古城

健さんの映画はここで撮りました麗江古城の賑わう一角

日本のテレビ届かぬ地にありて中国語放送耳に馴染めり

あやめ谷さくら草谷山深く住み分けもあり共生もあり

青き芥子尋ねゆきたり中国の高地の奥のさらなる高みへ

未踏の地と昔いいけるシャングリラ行くも戻るもいま自在なり

世界一の大摩尼車を回す人長寿富裕を願う人々

いま咲ける芥子もあやめもさくら草も一期一会の花の旅なり

祁連山分水嶺も定まらず峠三つをバスは越えゆく

ふるさとを訪ねるごとく飽きもせず砂漠の地への旅重なりぬ

私の一首

年の暮空の重箱友の元へ綺麗に詰められ私に届く

森岡陽子

もう何年に成るだろう、暮に空の重箱を預けて置く。大晦日の夕方、重箱におせちが詰められ私に届く。毎年感謝のみ。姪もつやつやに仕上った黒豆。千枚漬けを作ってくれる。私はただ食べるだけ。ごちそう様。

凍てつける階下の窓に降り立ちて降る降る雪の止みそうになし

白井信昭

一晚中凍てつく寒さの中を何度も降り立ってみる。窓の外は、雪が本降りになって来て積もり始めた。とうとう止むことなく翌朝まで降り続きどこかしこ真白くなりました。

森はふしぎなオルゴール

高橋育郎 作詩

森はふしぎな オルゴール

ポロポロ ポロロン

朝のひかりの 木もれびのうた

ゆらゆらゆれて チロチロ チロロン

ほだ アンダンテ

森はふしぎな オルゴール

サラサラ サララン

みどりの葉っぱの 合唱団だ

ささやくように さやさや さやさん

ほら ピアニシモ

森はふしぎな オルゴール

ピロピロ ピロロン

夜ぞらに遊ぶ こどもの星が

はしゃいでいるよ ピカピカ ピカリン

ほろ スケルツアンド

森はふしぎな オルゴール

シャラシャラ シャララン

風がうたうよ 鈴をふるよに

みんないきいき シャラシャラ シャララン

ほら コンブリオ

「歴代天皇御製歌」(七十二)

貫名海屋資料館

「後西天皇」^{じさい}第百十一代・在位一六五四年(十八歳)・一六六三年(二十七歳)

後西天皇は、後水尾天皇の第七皇子。母は逢春門院藤原隆子。この御代、明暦三年江戸の大火。万治元年伊勢内宮の炎上。寛文元年内裏の炎上など、大地震や水害が起った。

明暦三年、徳川光圀が「大日本史」の編纂を始める。

後西天皇は、書道、和歌に秀で、歌集「水白集」、日記「後西院御記」が残る。

(承応四年・一六五五年・十九歳)

嬉しきもうかりし節も打ち解けて逢ふ夜はいはむ言の葉ぞなき

(明暦三年・一六五七年・二十一歳)

今もなほ神代のまゝの跡とめてうたふさかきのもとすゑの聲

(万治二年・一六五九年・二十三歳)

み狩野やいかでわけまし御幸せし跡もなきまで雪つもりつゝ

(貞享元年・一六八四年・四十八歳)

思ひつゝ、うち出でぞめし一言を忍びかねたるこゝろとは知れ

『俳句』

寒梅や三段のぼる太鼓橋

森岡陽子

横綱へ続く花道春隣

門松の景に入り込む雀かな

冬夕焼眩しきビルの反射光

田中清秀

晴れ姿映す手水の氷面鏡

初晴や小言ひとつも申すまじ

姑の今は想ひ出節料理

重野善恵

門松の謂れを孫に教へけり

寒茜消えし辺りの細き月

悴める人差し指の先の月

今泉由利

持て成しは数滴絞る生姜酒

いつまでも生きゐるつもり小豆粥

掛け軸を替へていつもの冬座敷

米田文彦

植木屋の齡八十冬の梅

独り碁の石置く午後や白障子

搔き分けて見つからぬまま竜の玉

柳田皓一

草生えず静かな庭や冬深し

風邪ぎみに同じ葉の二人かな

筆塚の塵ひとるなき初大師

山元正規

木木の芽に雨のやさしき春隣

藁苞の雪の匂ひや冬牡丹

Gパンの破れもファッション初詣

山迫京子

道端の草叢掻き分け竜の玉

初場所や昇進力士にもらひ泣き

末っ子のいつもはじっこ冬蒲公英

植村公女

初富士の見え隠れして箱根路

晴天や突き差してゐる冬木立

遠山に日の当りたる枯野哉

虚子

河豚食ふや短き命みぢかき日

唐橋を照らして月の上りけり

美しく先づ眼福や桜鯛

公園あかるいとこくらいとこ木の芽

癖三酔

水に蔵うつりて若葉と家々と

春水にありとあらゆる小魚かな

柿の木を見て居ればはてしなく暮るる

かさね吟行会

「目黒自然教育園」 一月

米田文彦

正月の華やきも落ち着いてきた十三日、港区白金台の自然教育園を訪れた。国立科学博物館の附属施設であり、JR目黒駅、地下鉄白金台駅からほど近い。

今日は寒の入りから九日目、降雨ならば寒九の雨とって豊作の前兆とされている。しかし寒い冬晴となり吟行には有難い日となった。

ここは五百年ほど前は豪族の館であり、江戸時代は松平家下屋敷、明治時代は陸海軍火薬庫、大正になって白金御料地と転変の歴史を重ねてきた。

大名下屋敷の頃の敷地の一部はかつては迎賓館にも使われたことがあり、現在は庭園美術館になっている。自然教育園の隣にある。

この間一般人は立ち入ることができなかったため豊かな自然が残された。昭和二十四年天然記念物・史跡に指定され一般公開されるようになっていた。

今は武蔵野の草原や雑木林が残り、野草が繁茂し鳥を

呼び、また滅びゆく種の保存も行われている。

入園者数についても自然保護のため同時に三百人を超えないように配慮され、園内のもの、例えば道のどんぐりも持ち帰りは禁止されている。

入ると林の中の道端にいろいろな野草が繁茂し、大木が空を覆い、葉を落とした木々が我々を迎える。

枯木のようになった落葉樹も春を待っているのだろうが、名札が掲示されているので「あ、これが・・」と分かりやすい。赤い実をつけたセンリョウ、マンリョウ、アオキもたくさんある。

進む先にハクセキレイが飛び降りて歩いている。カラスの鳴き声も多いのだが、シジュウカラやコゲラ、カワセミなど可愛い鳥もたくさんいるらしい。

豪族館跡の土塁という景物なども見ながら進むと、前を行く仲間がしゃがみ込んで何かを覗き込んでいる。

蛇のひげという草を掻き分けて実を探していた。艶のある紫色であり、龍の玉という。丹念に探すときよく見つかって面白い。龍の玉は今月の本部句会の兼題であったことを思い出す。

蛇のひげを分けて日差しの玉を見る

素山

龍の玉きらりと光る自然園

由利

手さぐりの指先にあり龍の玉

文彦

沼を覗き込んだり、高台から池にいる白鷺と青鷺を見
ついたりして進むと、水生植物園に出てきた。

手庇に池を巡りて寒の晴

さち子

薄氷の池水草の折れしまま

京子

暗い景色の中に枯葦が一面に立っているが、その先に
白いガマの穂をふっくらと付けている。そして絮を風に
飛ばしている。写真を撮る人も多い。朝早くにはシモバ
シラが穂の下に付くという。

向こうでは白鷺が水の中を突っついていてる。

三寒の白鷺白を極めけり

正規

冬眠の瓢箪池の黙寂かな

善恵

枯尾花穂先光りて飛びにけり

皓一

そろそろ行かねばと、正門へ向かう。

この自然教育園のすぐ横には首都高速二号線が走って
いるのだが、まったく騒音は聞こえない。防護壁と深い
樹々のお陰だという。

寒禽のスタッカートで鳴いてをり

周二

冬の芽の柔らかさ増す日和かな

陽子

句会は目黒区田道の消費生活センター会議室で開かれ
た。いつも通り囑目三句、四句選、無事に素晴らしい寒
日和の吟行の一日を終了した。

■かさね吟行会■

日時 三月十日(金)

場所 帝釈天 山本亭

集合 柴又駅 11時(JR金町線)

申込 森岡陽子宛(03)3712・2835

『酔いの徒然』（五九）

丸山 酔宵子

『ポートワイン考』

日本のワインの先駆けは、サントリーの鳥居信治郎が1907（明治40）年売り出した「赤玉ポートワイン」で、これが美人ヌードポスターの評判とともに爆発的に売れ、サントリー発展の礎となったのである。1973（昭和48）年に国際呼称条約で、現在の「赤玉スイートワイン」に変更されたがその基本はポルトガルの誇るポートワインに由来している。

ポートワインとは、ポルトガルの北部ドウロ地方で造られるワインで、シェリー酒、マデイラ酒と同じ酒精強化ワイン（Fortified Wine）。通常のワイン（Still Wine）を作る過程で、糖分がアルコールに転化する途中にブラ

ンデー（77度）を添加し、糖分が残ったまま発酵を止め、アルコール度数のやや高め（20度前後）の絶妙な甘口ワインとなる。

ドウロ地区で酒精強化されたワインの原液は冬を越し翌年の春頃、ドウロ川を下ったポルト市のヴィラ・ノヴァ・デ・ガイアに運ばれシッパの持つ倉庫で熟成させるのであるが、ガイアで熟成させないものはポートワインとは一切言わせない。それぞれのシッパの倉庫でルビー、ホワイト、トゥニ、コルヘイタなどの種類に分けられ熟成される。長いもので50年から60年もの熟成期間を経て、徐々に香りを豊潤にしていき、味わいも深くなっていく。

ポートワインは「ポルトガルの至宝」で、その価値あるブランドへのこだわりは半端ではない。特に権威あるポートワイン・インスティテュート（IVP）で認定された「ヴィンテージ」という最高級呼称は、ドウロ地区

での葡萄の生育の良い年しか許されない。1960年、1963年はヨーロッパ全域が不作であったが、ドウロ地区は20世紀最高の出来でヴィンテージ呼称が許された年なのである。

今、書齋のライティングデスクの上には1960年と1963年のヴィンテージポートが封を切らずに白カビがついた状態で鎮座している。因みに、1960年は皇太子徳仁親王、1963年は雅子妃殿下の生まれた年である。クリスティーやササビィでのオークションではかなりの高値とか。

50年以上も経過すると、白カビが付着するだけではなく、コルク栓が瓶と一体状態になっていて通常のコルクスクリューで開けようとしてもコルクが潰れてしまう。そこで、登場するのがパンス・ア・ポルトというペンチのような器具で、ヒーターで赤くなるまで焼いて、これで瓶のネックを挟んで切り落として開ける。漸く開栓し

た熟成したヴィンテージポートは、ボトルの底に澱が溜まっているため、フィルターで丁寧に濾してクリスタル製デカンタに注ぐ。この厳かな一連のセレモニーともいえる所作は、本物のソムリエとなるための大切な技術なのである。

50年の歳月を経て現代の空気に晒されたビンテージポートは、なじませるために1時間から2時間ぐらい落ち着かせておくことが必要である。この至福のヴィンテージポートをいつ開けますか・・・。

節分やポートワインで頼染めて

酔宵子

本からのあれこれ(16) 米田 文彦

「美味しいもの」

お話の中に出てくるおいしそうな料理、素敵な飲み物。美味しそうなものが出てくる簡単な描写が忘れられないという物語は数多い。

小学生のころ読んだ岩波少年少女文庫「あらしの前」。オランダのヨングという女性作家がナチス侵攻前後のある一家を描いた話だが、私は知らないお菓子の描写、オランダのサンタクロースの話など、挿話・背景として描かれていることの方をよく覚えていいる。本をいま引っ張り出してみる。

赤ちゃんが生まれたときに一家がお祝いに食べた飴のついたラスク（当時はラスクなんて知らなかった）

校長先生が魔法瓶から注いでくれて言ったのが「チョコ

コレートを一杯どうかね」（チョココレートを飲む?）

少年ピムが好物の、干しブドウ入りのロール菓子とアニス入りのミルク（アニスって何?）

そのロール菓子をピムが広場で売るセリフ、

「皆さんバタを何センチも厚く塗るんですよ!」

（バタを何センチも厚く塗る?）

一家がそれぞれプレゼントを用意して積み上げ待っていると、皆のいるところにサンタクロースが大きな袋を担いだ従者のペテロを連れて入って来る。サンタクロースは一家の人たちとお話しをしながら袋の中からサンタクロースからのプレゼントをくれる。ピムはみんなが父さんとお母さんにお礼を言っているのを不思議に思う、「サンタクロースにお礼を言わなくちゃいけないのに・・・?」

ナチス軍は、オランダが防御線として作った水浸しの地帯を飛行機と落下傘部隊で一気に突破してきた、そし

て降伏。

しかし最後にお母さんは言う。「いま私たちには生き抜こうという意思の他には何もありません。だから、人類と正義に対する信仰を持ちましょう！」

もう一冊「ふたりのロッテ」。

ふたこの女の子が親の不仲のために別々に育てられ、たまたま夏の休暇の湖畔に出会って事情を知る。

親たちを仲直りさせるためにふたりはヘアスタイルも変え、相手に替わって帰っていく。作者はケストナーで日本でも美空ひばりの一人二役で映画が作られたそうだが、私には食べ物のところに記憶があるのは同じなのだ。

ふたこのルイーゼはオムレツが大好き。ロッテはオムレツは大嫌い。でも交換していることを皆に知られてはならないから食べなくてはいけない。食堂でボーイさんに言われる。「おや、もう終わりですか？まだオムレツ五つ目ですよ！」

小学校一年か二年生の夏のある日、兄に映画に連れて行って貰ったことがある。兄は面倒だからと嫌がったが、母の一喝でそうなった。

映画はジョン・ウエインの「黄色いリボン」と「アラビアンナイトの盗賊のお話（魔法の絨毯が飛んでいた）」の二本立だった。あの頃の映画館の混み具合はすごかった。

まあ、やっぱり兄には面倒を掛けたが、渋谷から帰る途中で何か食べるようになった。

ラーメン屋のカウンターの隅に座り、冷し中華を食べた。偶然会った兄の同級生も一緒だった。

私が冷し中華というものを食べたのは、これが初めてだった。なんという美味しいものか！

ひんやりして、麺はつるつる、氷が載っている。きゅうりとハムと紅シヨウガと、酸っぱい大人の味。辛子もたくさん添えてある。美味しい！

西部劇「黄色いリボン」の記憶は、混んだ渋谷の映画館と、あのお皿いっぱい冷し中華がセットになっている。

ある自然科学者の手記(58) 大橋望彦

『生・若・老・死』

「癌研時代」(S33・1・11) S47・5・31

1) 大塚の癌研は、戦災で焼失したが、研究所と病院の一部(大塚分院として放射線科の一部)が復興され、昭和30年に再開した。しかし、周囲は未だ焼け跡が広がっており、JR線の大塚駅ホームに立つと、北側の稜線に軍艦マストのようなシルエットが浮かび上がっていた。これが癌研の建物の特徴で、駅から癌研まで遮る物が無かったのである。今の癌研通りは立派に舗装もされ、両脇に色々々な店舗でぎっしりと詰まっているが、当時は、所々に焼け跡の家庭菜園があり、土が一杯であった。雨が降ろうものなら、未舗装の道はグシャグシャの泥んこ道となり、通勤には長靴が必需であった。車が通ろうものならば、撥ねを防ぐために傘を横にして構えたものである。ちょうど今は、ギリシャのアテネでオリンピックが開催されるということで、各種報道もこの点に集まっているが、1964年(昭和39年)の東京オリンピックの開催されたときのことを懐かしく思い出す。開会の日

に東京の空は晴れ渡り、青空に五機の飛行機が揃って大きな五色の五輪を見事に描いてゆくのを、大塚癌研の軍艦マストの屋上で、研究所の所長始め殆どの職員がこの世紀のお祭りを眺めながら拍手を送っていた。

丁度その頃、中原和郎研究所長は福岡文子博士とともに、発癌実験をされていたが、少し変わっていたの思ひ出す。即ち、一般には動物実験といえば、ラット・マウス・ハムスター・モルモットウサギといった齧歯類が主体で、イヌ・ネコ・サル等は稀といっても良かった。鳥類としては、ニワトリ、とくに鶏卵が使われていたが、ほかの鳥を使う人はあまりいなかった。ところが中原先生は、ジュウシマツ(十姉妹)を実験動物に選ばれたのである。十姉妹はおとなしく扱い易いし、粒餌で飼えて、丈夫に育ち、鳴き声がそんなに煩くない。また、その名の如く繁殖が盛んで、純系に近い均衡系が容易に得られる。さらに、薬物に対する感度が高く、色々な反応が早い時期に現れる。等々利点を挙げられていた。先生の持論は、動物実験をする時に、どんな種類の生物を選ぶかで、実験の半分の結果が決まる。その生物の持っている特徴を何処まで自由にこなせるかで実験の進捗が極めて左右される。生物を材料として使う研究者はこのことを

良くわきまえる必要がある。と言われていた事が「大塚の癌研」を思うにつけ、よく思い起こすことの一つである。

2) 最初に取り組んだ研究課題は「トキシホルモンの精製とその化学構造の研究」であった。

3) 日本で第三機目の米国ベックマン社製「アミノ酸自動分析器」が癌研に入った。

4) 「博士論文のテーマ」

フレンド・ウイルスによるマウス脾の悪性腫瘍とトキシホルモン産生。フェニール・ヒドラジンによるマウス脾の肥大（フレンド・ウイルス感染マウスの肥大脾のコントロールとして有効）。

上記研究成果を研究テーマとして、癌研から九州大学の教授になられた遠藤英也先生のお骨折りにより「九州大学医学部より医学博士号授与される。」

5) 「青木昌子さんと結婚」（昭和35年6月12日、於日本工業倶楽部）

6) 「ヘテロの会」発足

廣川秀夫上智大学名誉教授（植物学）。三浦謹一郎学
習院大学院高分子研究所所長（生化学）、渡辺良雄元筑
波大学副学長（動物学）、大場美樹元金沢大学学長（薬
学）、故酒井彦一東京大学名誉教授（動物学）。水野重樹
東北大学名誉教授（生化学）、その他、及川東北大名譽
教授（生化学）、小生（生化学）等で組織する分野が違っ
ても興味は同じくする（ヘテロ ディスカッス *hetero-discuss*：異なった領域の）
討論集団が出来た。小生の下宿の狭い六畳間に黒板一つ
持ち込んで、ギョウ詰めでも *discuss* は充分出来たし、
癌研の図書室で行なったり、小生の常盤台の部屋で、ワ
インパーティをしながら5時間余り討論に花が咲いたこ
ともある。誰か一人が話題提供者となり、スライド等を使
って、自分のやってきた仕事の話を充分時間を掛けて説
明するのである。その話の途中で質問があれば、いつ
でも割り込んで、質問し充分納得するまで脱線しても構
わないで説明するのがルールである。日頃学会等での討
論も之ほど十分時間を掛けて討議することは不可能で
あったが、此処ではそれがルールであるので、皆真剣に
時間をフルに使って討議した。今皆偉くなってしまった
が、また何時か一堂に会して、いろんな話を聞きたいも
のである。

絹の話 (76)

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

絹の弱点

●絹の黄変

絹（家蚕）のブラウスなど大事に仕舞っておいて、いざ着ようとして取り出したら黄ばんでいて、がっかりした経験のある人は大勢いらっしゃると思います。

なぜその様な事になるのか、それを防ぐ妙案はあるのでしょうか？

絹の黄変の原因は、光の波長の短い破壊力の大きな紫外線と空中の酸素、140℃以上の温度の三つです。

黄変が起こる主たる原因は光と酸素による光酸化作用による着色なのです。光酸化作用とはシルクの20種類の蛋白質の中で酸化されやすいトリプトファンやチロシンの様な酸化されやすいアミノ酸が黄色物質に変わる為といわれています。

この酸化は水分の多い所ではより促進されます。

温度の問題は、一般の生活では絹が140℃以上の温度にさらされ続ける事はありません。アイロンをする時くらいでしょうか、絹にアイロンの当たる時間は大変短いので、あま

り心配は要りません。ただアイロンの温度が上がり過ぎないように蒸気が出ている状態で使用して下さい。絹は親水性の繊維ですので、湿度と温度が加わると細かいシワもサツト一氣にとれます、何度もごしごし同じ所にアイロンを当てて絹の温度が上がり過ぎないように注意しましょう。

アイロン仕上げの終わった物は直ぐ仕舞わずに放熱させてから収納して下さい。

黄変防止の方法は古くから色々研究されて来ていますが、確たる方法は見つかっていません。

市中には黄変防止の科学処理をした物も出ていますが、効果が一時的であったり、風合いが損なわれてしまったりして、これといった物はありません。

それでは黄変を少しでも遅らせる方法を考えなければなりません。

先ず洗濯についてはカルキ等の塩素や鉄、マンガンの金属イオンを含まない水を使うとよいですが、一般の水道水にはカルキなど含まれていてなかなか難しいものがあります。温泉で洗濯したら一氣に黄ばんでしまったと云う話もありますのでご注意！

洗剤は中性洗剤を使って、洗濯石鹼や塩素系の漂白剤は絹の酸化を促進するので絶対使わないで下さい。

中性洗剤でも蛍光漂白剤入りは紫外線を吸収して青みがかつて白く見えますが、光酸化作用が促進され黄変を早める結果になりますので避けて下さい。

干す場合は直射日光を避けて下さい。

保存方法は光が射さない所、酸素と水分の少なく、高温にならない所がよいという事になります。

密閉出来るプラスチックの箱に吸湿剤、脱酸素剤など入れて保管するとよいです。

●絹のけば立ち（摩擦に弱い）

絹を着ていると衿や袖口など摩擦の多い部分が以外に早くけばだち、穴があいてしまつて、本体は何処も痛んでいないのに、もったいないと思った人は少なからずいます。

けば立ちはどうして起るのか？

絹織物はセリシンと云うお米でいえば糠に当たる部分を取り除いて白米に当たるフィブロインと云う蛋白質の部分を糸にしていますが、このフィブロインはアミノ酸の分子が縦に繋がったものが束なつて出来ていますので、摩擦されると、その束の一部が切れて、枝毛の様にけば立ちます。さらに進むと糸が切れて穴が空いてしまいます。絹は他の繊維に比べて摩擦強度の強くない繊維といえるでしょう。しかし糸の

太さ、撚糸の仕方、織り方の密度や組織によつて摩擦強度は変わつて来ます。

けば立ちを防ぐには

けば立ちを防止するよい手だてはありません。

絹は洗濯する時にけば立たせてしまふ事が多いので、けば立ち難い洗濯をする事が肝要です。（除ドライクリーニング）

絹を水に入れると、絹の蛋白質繊維は親水性ですので、水分を吸収して膨潤し、その中のアミノ酸の束の結合が緩まつて、もみ洗いをすると枝毛が発生してしまいます。絹はやさしく押し洗いが最良の方法です。

絹織物の糸の作り方にはお米の糠の部分に当たるセリシンを残した物もあります。どの位残すかで風合いが変わつて来て、擦れに強くなります。このセリシンはお米の白米に当たるフィブロインよりも親水性で温水に溶けやすいので、30℃以下の水洗いをお勧めします。

干して乾くと固くなつた様なシャリツとした物になります。以上は絹の大きな弱点ですが、それでも人工の繊維は絹を手本にして作られて来ましたので、絹と同じような糸の構造の化学繊維もけば立ちます。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

六十六回

「月虹」 鯨島 満

十九 木下孝一 2

丹念に君は調べて箱根路の地図に茂吉の歌記しけり

「光の中に」平成二十二年

健脚の斎藤茂吉草鞋ばき箱根の山に汗を流しき

明神岳に登りし茂吉山中にレインコートを羽織り昼寝せしとぞ

題詞に「斎藤茂吉を語る」とあり、註に「結城千賀子氏講話五首」とある。結城千賀子は茂吉の「優秀なる秘書」と呼ばれる愛弟子の一人山口茂吉の後継者であった磯幾造の子で、右の歌の作者木下孝一とともに歌誌「表現」を守り続けている。二首目は講演者の体験のような表現になっているが、結句に「とぞ」を省いている。

虹こそは茂吉の歌のモチーフと君の解説を諾ひて聞
く

「雲は大きく谿にしづみぬ」の碑の写真傍へに講話
は佳境に入りつ

「結城千賀子氏講話」の残り二首である。一首目は、茂吉に虹の歌が多いことを踏まえての話があつたのである。箱根では月の光によって見える夜の虹を詠んでおり、山形県大石田では「虹の断片」を詠んでいる。

二首目は、箱根の強羅公園に建つ茂吉の歌碑の写真を横に置いて講話が続いたというのである。歌碑は「おのつから寂しくもあるかゆふぐれて雲は大きく谿に沈みぬ」（『ともしび』）を刻み、昭和三十五年に除幕された。

少年の金子阿岐夫が朝々を茂吉に「用承りき

哲学を学べよと金子少年に茂吉は禪問答の如く奨め
き

口伝のごと金子氏が茂吉に教はりき「自分の土俵で
論争しなさい」

註に「金子阿岐夫氏講話五首」とある。金子阿岐夫は、第二次世界大戦中山形県金瓶に疎開していた茂吉が敗戦後に移居した山形県大石田に在住していた板垣家子夫の子（本名昭夫）である。

茂吉は板垣の紹介で富豪二藤部兵右衛門家の離れ（茂吉は聴禽書屋と名づけた）に住み、主に板垣に身辺の世話をしてもらっていた。阿岐夫は父の代わりに茂吉

のところに行き用を承ることがあったのである。なお、金子阿岐夫の茂吉詠については本誌二〇一五年一〇（二〇一六年二月号）において述べた。

精神科医斎藤茂吉の医の理念 患者の言葉にゆめ逆らはず 同

日々茂吉の独り言ききし君もまた医者になりそして歌人になりき

金子阿岐夫講話の残り二首である。

阿岐夫が茂吉とのかを詠んだ歌には、「大石田に病み給ひしとき一夜わが添寝せしこともひとつ思ひ出」学びてまだ浅きわれにドイツ語の会話強ひにき病は癒えて」（『黄の光』）他多くがある。茂吉は阿岐夫の進路の相談にも乗っていて、結局、阿岐夫は医の道に進むことになったのであった。

けふわれは斎藤茂吉のふるさとへ新幹線の「つばさ」に乗りつ 同

最上川をうたひ蔵王の山おもふ茂吉の『白き山』をわれは尊ぶ

ここから次号へかけてしばらく「茂吉のふるさと」と題する歌群を味わうことにする。一首目は「茂吉のふる

さと」への旅のプロローグ。茂吉が知る事のなかった新幹線を利用したのである。二首目で茂吉が精魂傾けて詠んだ『白き山』の世界に作者はもう入りこんでいる。茂吉は「蔵王より離れてくれれば平らけき国の真中に雪の降る見ゆ」（大石田移居）、「最上川の上空にして残れるはいまだうつくしき虹の断片」（虹）と蔵王を歌い最上川を詠み続けているのである。

この道をわれも行くべし「写生道」茂吉の書になるモニュメントあり 同

楕円形の卓袱台を勉強机とし茂吉は使ひき足継ぎたして

永眠の夜に型どりしデスマスクひかりは閉ぢし瞼に差す まぶた

「大根の葉にふるしぐれ」の碑の辺うねる白萩に黄の蝶の舞ふ

山形県上山市の斎藤茂吉記念館での作であろう。一首目の「この道」は茂吉のいう「写生道」で館内に展示されている。二首目は金瓶の茂吉の生家にあつたものが館内に置かれているのである。四首目「大根の葉にふるしぐれ」は茂吉の「ゆふされば大根の葉にふるしぐれいたく寂しく降りにけるかも」（『あらたま』）を刻んだ歌碑のことで記念館のある公園内に建っている。

楽しい時間 52

山本紀久雄

2017年1月31日

三遊亭円朝像…その一

佐野市立吉澤記念美術館で出あえた重要文化財の伊藤若冲の『菜蟲譜』（さいちゅうふ）、この経緯については、前号、前々号と二回にわたってお伝えした。

今号では、同じく重要文化財である「三遊亭円朝像」についてふたれたい。先日、東京国立近代美術館のMOMATコレクションを訪れはじめて見てきた。

この絵は鐫木清方（1878～1972）が昭和5年、第11回帝展に「三遊亭円朝」と題し出品したもので、平成15年に重要文化財に指定されている。

清方は明治11年生まれ、昭和47年没であるから、明治、大正、昭和と三世代を生き、上村松園、伊東深水と並び称せられる近代日本の美人画家である。

美人画で著名な清方が、円朝像という壮年男性肖像画を描いたのはなぜか。

背景には、清方の父親である条野採菊が関係している。条野採菊が明治19年に「やまと新聞」を創刊し、その創刊号から円朝が自作「松操美人生理」を連載したことからはじまる。

その経緯を岡鬼太郎が次のように述べている。（参照『三遊亭円朝』永井啓夫著）

『日刊やまと新聞発行の初、円朝の続き話は、速記となつて、珍しくも日毎日毎の紙上に載せられた。挿絵は年方氏であつた

と思ふ。木版彫刻は銀座の山本であつたか。何しろ紙面の縦半分ほど段を抜いた大挿絵が、惜気もなく、円朝の話と緒に出るのである。速記物連載の評判、円朝の評判、挿絵の評判、やまと新聞が軟か向に売れた事は、実に目覚ましい物であつた。

やまとの主幹は、作家としての山々亭有人、後の条野採菊翁であつた。採菊翁は円朝の蟲屋客でもあり、友人でもあり、而して其の採菊翁は、日日新聞に在社時代から、福地桜痴氏とは友人である。円朝は福地先生から西洋種を与えられた。芸人として、好い御蟲屋を有つたものである。（円朝雑観）

やまと新聞は明治19年（1886）創刊、その号から連載された「松操美人生理」は福地桜痴から聞いた外国種の翻案で高評を得て、続いて「蝦夷錦古郷家土産」を連載したように、やまと新聞は「円朝物」の連載によつて売れたといわれている。

だが、円朝もやまと新聞によつて、この後、多くの作を発表することができ、芸人というよりむしろ作家に近づいたともいえる。

後に条野採菊の息子である清方は、当時の思い出を次のように語っている。

『速記は以前私が木挽町ら居りました頃、私の宅でやつたり、尾張町にもと鶴仙と云ふ寄席があつて、其の向うに寿鶴といふ鳥屋があつてそこでもよくやりました。挿絵をかく芳年さんが大きな眼鏡の下からポロポロ涙をこぼしながら師匠の話を聴いてゐた姿が眼に残つてゐます。（円朝遺聞）』

明治28年（1895）、円朝は18歳の健一（条野の息子・清方）を連れて野州方面の旅に出ている。健は軽い脚氣を患つていたが、旅に出れば癒えるという円朝のすすめに従つたのである。この旅行は健のはじめての旅でもあり、また二世の名人と称される人の随

行でもあったので印象深く胸に刻まれ、「初旅」（『清方随筆選集』昭和19年）と、「円朝と野州を旅した話」（雑誌『寄席風流』第五号 昭和30年）で、足利、栃木、佐野、田沼を歩き、田沼の宿・柳屋で泊った際の思い出を述べている。

《田沼では柳屋といふ宿に泊った。昔は柳橋に居たといふ、小髻の禿げ上がった内芸者が、客を円朝とも知らないらしく、東京の人ときく懐しさに、あれはこれとは東京の噂をききたがる。ここは潯陽江（注）現在の江西省九江市の北を流れる川）ではないけれども、時は楓葉荻花（注 楓の葉や荻の花が色づき秋風が吹いてものさびしい）の秋、どこか芭蕉の越後の宿にも似て、世の中を知りつくして、禅僧のやうに枯淡の境に入った名人と、漂泊の旅芸者との対応はちよつと戯曲にもなりさうだが、少年のセンチメンタルと違つて師匠は一向興味もなかつたらしく、刺身や塩焼のお膳を眺めて、「姐さん、あなたの今夜のお菜は何です、いいえ、ほんたうにさ、……え、親芋の煮つけ、そりあ結構、それとこれを取り換へつこをしようぢやありませんか、いや、ほんとうに、冗談ぢやない、健ちゃん、あなたもどうです、かういふところはお芋の煮たものに限りまず、さあさあ」とうとう芋の煮つけを徴発して了つた。白楽天、御茶人だけに意地が汚い。》（昭和7年8月）



この時、円朝は57歳。清方が旅先で身近に円朝と接した体験から、後年、円朝50歳代をイメージし高座姿で描いた「三遊亭円朝像」、東京国立近代美術館4階ハイレイトコーナーに展示され、そこで次のように解説されている。

《鐔木清方による肖像画の第二作。モデルは明治時代の大噺家、三遊亭円朝（1839-1900）です。芸の大きな名人は実際よりも大きく感じられるといいますが、この作品の円朝が大きいと指摘されるのもやはり、清方の記憶のなかにある高座姿を描いているからなのでしょう。一方、調度や着物は、実物にあたつて細かく再現的に描かれます。記憶に刻まれたよく知る人物の姿を、現実感のある道具立てとともに描く。清方はこの手法によつて「文字に依らない伝記」としの肖像画に新しい領域を開きました》

確かに瘦身の円朝が大きく見え、威厳がある。日経新聞（2016年12月18日）の「美と美・落語の楽しみ 上」で、中沢義則記者は「三遊亭円朝像」を取り上げ、次のように感想を述べている。

《格子縞の座布団にきちんと座り、その前に扇子が丁寧に置かれている。几帳面な人なのだろう。だが、やはり芸に生きた人だ。襟元はやや開いていて、猫背気味の白い首筋が露わになっている。両手で包み込むようにして持つ湯飲み茶碗から白い両腕も大きく露出して粋な雰囲気醸し出す。それなのに、姿や顔貌に緩みはまったく感じない》

さすが記者らしく、全体を網羅的に適切に表現しているが筆者の見解は異なる。続次号。

漢詩研修 (五)

千代田岳精会 平井茂行

春望
しゅん ぼう

杜
と

甫
ほ

国破山河在
くにやぶられて さん が あり

城春草木深
しろはる そうもく ふか

時感
とき かん
じては 花にも涙も
はな にも なみだ も
濺ぎ
そそ

別恨
わか うれ
んでは 鳥にも心を驚かす
とり にも こころ を おどろ

烽火三月に連り
ほう かつ さん がつ つらな

家書万金に抵る
か しよ ばん ぎん あへ

白頭搔更短
はく とう しか さう い かく

渾欲
す べ じん へ たい せう ぐ

【作者】

杜甫（七一二～七七〇）盛唐の詩人。字は子美、少陵と号した。襄州襄陽の人。祖父は初唐の詩人杜審言である。三十五歳頃まで各地を遊歴している。この間に李白や高適と交わり、また進士の試験を受けるが及第せず、困窮生活を送った。天宝十四年（七五五）四十四歳の時、太子右衛率府胄曹参军（武器の管理と門の出入りを取り締まる）となり、この仕官を喜びこれを家族に知らせるべく疎開地の奉先県に赴いた。そこで安祿山の乱に遭い、家族を鄜州（陝西省）羌村へ避難させた。翌徳元年（七五六）靈武（寧夏省寧夏県の東）で即位した肅宗の元へ参じようとして賊軍に捕えられ長安に軟禁される。翌至徳二年、賊軍から逃げた。

【語釈】

○春望……春の眺め。○国破……国都が破壊されること。○山河在……山や河が昔のままの姿で存在すること。○城……長安の町を指す。中国の都市は城壁に囲まれている。○時……時世、時節。○烽火……のろし。○三月……三ヶ月。つまり長い年月、他に春三月の現在を指すという説もある。○家書……家族からの手紙。○抵……相当する。値する。○簪……男が冠を付けた時、その上から髪にさし冠を固定するピンのこと。

【通釈】

国都長安の町は、賊軍の為にすっかり破壊され、あとには山と河が昔のままにある荒れ果てた町にも春がやってきて、草や木が深々と生い茂った。この戦乱の嘆かわしい時節を思うと、花を見ても涙が落ち、家族との別れを悲しんでは、鳥にも心が痛む思いがする。戦いの烽火は三ヶ月もの長い間続いており、家族からの手紙はなかなか来ないで万金にも値するほど貴重だ。度重なる心痛の為、白髪をかけばかくほど短くなり、全く冠をとめるピンも刺せなくなりそうである。

【参考】

松尾芭蕉が奥の細道に「国やぶれて山河あり城春にして草青みたり」と引いているのは有名。芭蕉が杜甫の詩集を携えて旅をしていたことはよく知られている。

【参考文献】

「杜甫」岩波文庫。「李白杜甫」学研。「吟詠全集絶句編」吟涛社。

隙間

夏目勝弘

広辞苑より

○物と物との間の少しあいている所
すき・あい

○あいている時間
ひま・てすき・いとま

○乗すべき機会
油断・てぬかり

○隙間風・戸や障子などの間から入ってくる寒い風。比喩的に親密だった間柄に生じたよそよそしさ、雰囲気。また疎遠、対立関係になりかねない兆候。

○隙間産業、既存の企業が進出していない小さな分野や市場で成り立つ産業。

隙間ということは、人間の物的な面から心的な面まで、多くの事柄が含まれている。

隙間風一つを取り上げても、色々なことが考えられる。

古い日本建築では、冬になると寒い隙間風が入ってきた。こんなことが始めに思いつく年代である。

隙間風を防ぐテープが売り出されてもいた、それも隙間産業から生れた製品でもある。

現代建築ではそれぞれの部屋が仕切れ、密閉状態になつているため、隙間風は入らないがクラーが必要となる。

その弊害として、火災の場合には気付くのが遅れまた逃げる所が少ないため死者が多く出ている。

古い日本建築の場合は襖や障子のみで仕切るため、気付くのも早い逃場も多い。

また襖や障子を外せば広い部屋となるため、冠婚葬祭等の多く

は自宅で行われていた。

現代では、ほとんどが葬儀会館やメモリアルホールを使用するのが一般的になった。

そのため隙間産業的なものが主産業にまでなつてしまつている。

○あいている時間の、ひま・手すき・いとま等も隙間産業から発展していったものが、大きなゲームメーカーとなつている。

内職を認める会社も多く出てきた。また内職の仕事も増えてきている。これらも隙間から発生した仕事ともいえるのではないのか。

○心の問題としての、乗すべき機会の油断、てぬかり等も多くの人が経験し苦い思いを持つ人が多いと思う。

多くの人々は毎日風呂に入り体を洗う。また愛車などもピカピカに磨き上げている。しかし自分の心を意識して、洗い磨いているのだろうか、ふと思つた。

○「ど根性○○」というニュースが一時テレビ新聞等で見たことがある。雑草も隙間を好む生き物でもある。

「ど根性○○」という見方は、人間が人間的な見方での表現であり、雑草にとっては隙間は別天地でもある。

石垣・舗装路・駅のホーム・塀の割目等々どこにでも、わずかな隙間があり、その隙間には各種の雑草が生えている。

これらの隙間は雑草にとっては、太陽を水を養分を、ひとりじめできる所でもある。

スギナは地下一メートル余りまで根を伸し、芽の先端の細胞膨圧は十数気圧にもなると言われている。そのためアスファルトなど突き破つてしまふ。

雑草は同じ株から出来た種子でも、大きさと重さがさまざま、次世代の繁殖のために、あらゆる環境に対応している。これらは万が一に備えて、そのつど発芽できるための備えである。（主張する植物・著者塚本正司・八坂書房より）

「氷魚」のことから (194) 岡本八千代

今は夜空の金星が美しい季である。そんな季、いろいろな想ひにかられる私——。

恰も漱石と子規のことを書くとうとしていることの倅わせにある。去年は漱石没後百年、今年は生誕百五十年である。そして親友の正岡子規も慶應三年（1867年）生まれであるから生誕百五十年に値する。ちよūdど私が彼らのことを書いている時の出合いの不思議さ、その自然に感動している私。

漱石と子規、男同士の友のユーモア。男同士の手紙のふざけの言葉、その中にある助け合いの真実……女性にはない何かがある。実は、子規は自分のことを「妾」といい、漱石を「郎君」とよんでいたのだった。「妾」というのは支那の文人の詩のなかで、若い娘が自分のことを「妾」といったのであった。「朗君」はその恋人といったところであった。

かくして、漱石は子規の願ひの体育の単位昇格に力をつくしたのであった。二人とも二年の三の組になった。

さて、いよいよ「木屑録」とは何ぞや。

子規の「七草集」に刺激されて書いた漱石の本である。「木屑録」という本の名もおもしろい。木の屑、木のこづば（木端）、つまらないものの意味、の本の名である。

ここに原文のはじまる文を書く。高嶋俊男（「漱石の夏やすみ」

の作者の文参考）。

○余見時、誦唐宋数千言、喜作爲文章。

或極意彫琢、經句而始成、或咄嗟衝口而発、自覺澹然有樸氣。竊謂古作豈臻哉、遂有意予以文立身。

これを注釈してみると、

（余兒たりし時、唐宋の数千言を誦し文章を作り爲すを喜ぶ。或は意を極めて彫琢し、句を経て始めて成り、或は咄嗟に口を衝いて発し、自ら澹然として樸氣あるを覺ゆ。竊に謂へらく古の作者豈臻り難からんやと。遂に文を以て身を立つるに意有り。）

高嶋俊男氏訳——。

（我輩ガキの時分より、唐床二朝の傑作名篇、よみならつたる数千言、文章つくるをもつともこのんだ。精魂かたむけねりにねり、十日もかけたる苦心の作あり。時にまた、心にうかびし名文句、そのままはれば瀟洒のきばえ。むかしの大家もおそるるにたりんや。お茶の子さいさいあさめしまへ、これはいつちよう文章で、身を立てるべしと心にきめた。）

この木屑録の冒頭文はやはり戯文あると思う。少年時代の漱石は、どこかでユーモアをもっている。子規も同じようにどこかにユーモアをもっている。二人とも楽しい人たちと思つてしまふ。いや、男と男の友情の魅力。

漱石の俳句にこんながある。

長かれと夜すがら語る二人かな

ことのはスケッチ(457) 今泉由利

「岡本癖三酔」

外国に住んで、時に日本に帰ってくる…ということをしていた頃。父が「癖三酔」からの父宛の俳句と俳画の葉書を三百枚程はあったか、父も同じ数程は「癖三酔」に送っているのだという。

父の記憶から、私は「麻布」「善福寺」辺りを探し巡ったけれど、何も見当たらなかった。そして、また外国に行ってしまった居たりして…そのままになっていた。

今、日本に居て、新聞に「さいたま文学館。虚子・かな女・癖三酔・書と画で楽しむ俳句」を見つけた。

すぐ、高崎線の桶川の「さいたま文学館」へゆく。父との日々が甦る。

岡本癖三酔、高崎生まれ、子規に師事。「三田俳句会」を興し、虚子鍛錬句会に参加。俳画を良くし、「ホトトギス」の俳句の選者を務めた。

神経衰弱と糖尿病のため、三田の松山病院に十五年以上の入院が続いていた。

御津磯夫（今泉忠男）は、松山病院に、研修医をして、病院内で句会などをし、「癖三酔」と知り合う。

磯夫は、父親の病院を継ぐため愛知県に帰ると、この二人の毎日に及ぶ「俳画・俳句」「短歌・写生画」の葉書の交換が幾年も続いた。父の書き残したものを、そのまま載せる。

「私の岡本癖三酔について」 御津磯夫

癖三酔は俳号であって、実名は岡本廉太郎である。東京麻布に住んでいた。早くより子規につき俳句をよくし、癖三酔句集もあるが、新傾向に転じ、碧梧桐、井泉水等と共にした。

私が医者になり、東京三田の松山病院の院長が大学の内科の教授であった故に、助手として勤務し、この病院の常連の入院患者、癖三酔との出会いとなった。昭和二年の事である。

癖三酔は風をおそれる性癖があつて、常に松山病院の病室を専用しており、風が強い日、台風が近づく予報にも直ちに入院してきた。病室のベッドに横たわることはなく、病棟の廊下などを歩いていた。時には、事務員や医局員などを集めて句会を催したりした。

ある日、私もその句会へ出席して投句した。「夕^ゆ百^も舌^ず鳥^ずの高音に書^{ふみ}を閉じにけり」という一句であったが、癖三酔は、「これは良い。俺はこの一句によつて作者を一生忘れない」と激賞してくれた。それが私と癖三酔とを結びつけて、その一生の終りまで俳句と俳画とのハガキと、私の短歌と写生画とのハガキの交換が始まったのであつた。

私は、やがて田舎に帰つて父を継ぎ、開業医の生活をしながらも、一日の往診など終つて夜のひととき、癖三酔宛への画ハガキを書くのであつた。そして、麻布から、毎日のように俳画俳句の画ハガキが届けられるので、私も、それに合わせて必ず、その日に返事をするのだつた。画ハガキは百枚、二百枚、三百枚とたまつていった。

時には、条幅や画帳なども頂いている。私の画いたも

のも、癖三酔のもとに届いている。今日も、私の部屋には癖三酔の条幅がかけてあり、「むしの音身をめぐる闇に目閉ぢて」と賛のある、大きい黄色の鶏頭の花である。

私は六十年、三河アララギという短歌誌を主宰し、アララギの写生の短歌を作りつづけてきて、画も実物を見ての写生画だけしか描けないので、それを実行してのハガキ画であつた。

癖三酔も「根本はやはり写生ではなければ」ということを、私には言っていた。写生した木の葉などもこまかく描いて届けられたりした。私の短歌にも、癖三酔の影響があつたことを思っている。



癖三酔色紙
「公園あかるいとくらいとこ木の芽」



癖三酔色紙
「水に蔵うつて若菜と家」と

編集室だより【二〇一七年一月】

○天皇陛下御製歌

幼子の静かに持ち来し折り紙のゆりの花手に避難所を出づ

○皇后陛下御製歌

ためらひつゝさあれども行く傍らに立たむと君のひたに思せば

○熱海・多賀神社へ参拝。

無患子大樹の木の下に、無患子の実が散らばる。子供が病気になるまいというこの実が大好き。無患子の泡で絹の物を洗う。でてきた黒い丸い種は、羽根突き^かの羽根にする。

○安達太良山の伏流水でつくる「特別純米新米新酒」をいただく。学生時代、安達太良山の麓で、織物、染物^{しめ}を習った事を思い起す。

○外国生まれ。ニューヨークに住む子達に、少しでも多く日本を知つて欲しい。出掛けるは日光・東照宮・華厳の滝・中禅寺湖・いろは坂…。

限らない寒さに、風景はキュッと引き締り、それはそれは美しいと共に、巨大な権力の東照宮に恐れ戦く。

行く道。帰る道。いろは坂。中禅寺湖…。人影無し。

ま近く聳える玄武岩質の柱状節理の狭間を流れ落ちる滝のリズムを身に受ける。

○湖岸が凍る中禅寺湖。その先に、白根の白い山脈。思い出は冷凍保存。

○近所の寿司一。のれその三杯酢でいただく出雲の月山。辛口純米。しばらくたて。昔、お殿様にお届けしたお酒と。清らかな美味しさに身も心も透きとおる。

○目黒教育自然園へ吟行。

普段見慣れている草木が、すっかり冬の姿をしているのが興味深い。冬姿から、春への仕度が垣間見え、うれしくなってくる。

○池袋園芸場へ「柳家小三治師匠」の「野晒し」。

前売券を持ちながら、最後の椅子ほどにとびつく。もう一人もはいれないほどの人々が集まり、それでも、どんどん観客は入つて、もう目茶苦茶。人の上に人が乗りかかってくる。怖くなりつつ、面白い出来事でした。

○「さいたま文学館」にゆく。

新聞の「美術館ガイド」で見つけた。さいたま文学館で、虚子かな女・癖三酔・さいたまに縁の「俳人」の展示をしていると。癖三酔は埼玉の人ではないけれど、虚子との縁、ということで、作品は少なかつた。やつと探し当てる事が出来た感慨。

○千代田岳精会・会長・鈴木精成会長がご指導下さる詩吟の勉強会。

「寒夜の即事」寂室元光作。

即事・その場で詩歌を作ること。

三更・日没から日の出までを五つに分け、三番目の時刻。

葉雨・雨のように降り落ちる木の葉。

鈴木会長・後に知ったのですが、時習館高校の先輩です。この偶然を感謝して弾む。

野菜の花（9）

鈴木 孝 雄



○ サヤエンドウ

サヤエンドウの白い花は実に可愛い。早春に咲くせいなのか。サヤエンドウ栽培は、スウィートピーを想わせる花と、食用の鞘の両方を楽しめられる。花は2〜3日で萎れてしまうが、その後には必ず小さな若い鞘が形成される。花には白と赤の色があるが、私の経験では味に違いは無い。

エンドウの花と言えば、中学の頃学んだメンデルの法則を思い出す。自家受粉のし易さと、花・実・丈などの特徴がはっきり現れるのが遺伝実験材料に使われた理由である。

エンドウには鞘の硬さと実の大きさの順に、サヤエンドウ（絹サヤ）、スナップエンドウと実エンドウ（グリーンピース）がある。サヤエンドウは黄緑色の未熟な鞘を食べるために栽培される。

絹サヤと云う名前の由来は気に留めなかった。数年前収穫時にたまたまサヤが擦り合わさって衣擦れの音がした。そうか、これが命名の元となったのかと合点。それ以来収穫時には時々音を確認、古人の優雅な暮らしを想像している。

地中海沿岸原産のエンドウが日本で普及したのは明治時代。今では色々な和食にも、早春の香りと彩りを添える、無くてはならない野菜となった。栽培は通常11月上旬に種を蒔き、苗で冬を越す。1月支柱用の筐の中に苗はすくすく伸び、3月には花が咲き始める。

鞘の収穫時に摘み逃すことがよくある。そんな時は、花は対に咲く1つ有ったらもう1つあるはずだ、と自分に言い聞かせて目を凝らす。そんな季節がもうすぐやって来る。

次回はキュウリの花の予定です。

お知らせ

△四月号の原稿は、二月二十八日（火）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。
郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月
の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アラギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アラギ」について

◇三河アラギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。
振替口座〇〇八三〇一六一五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アラギ発行所・〒一一四一〇〇二二
東京都北区王子本町一―二六―六A
TEL・(〇三) 五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美